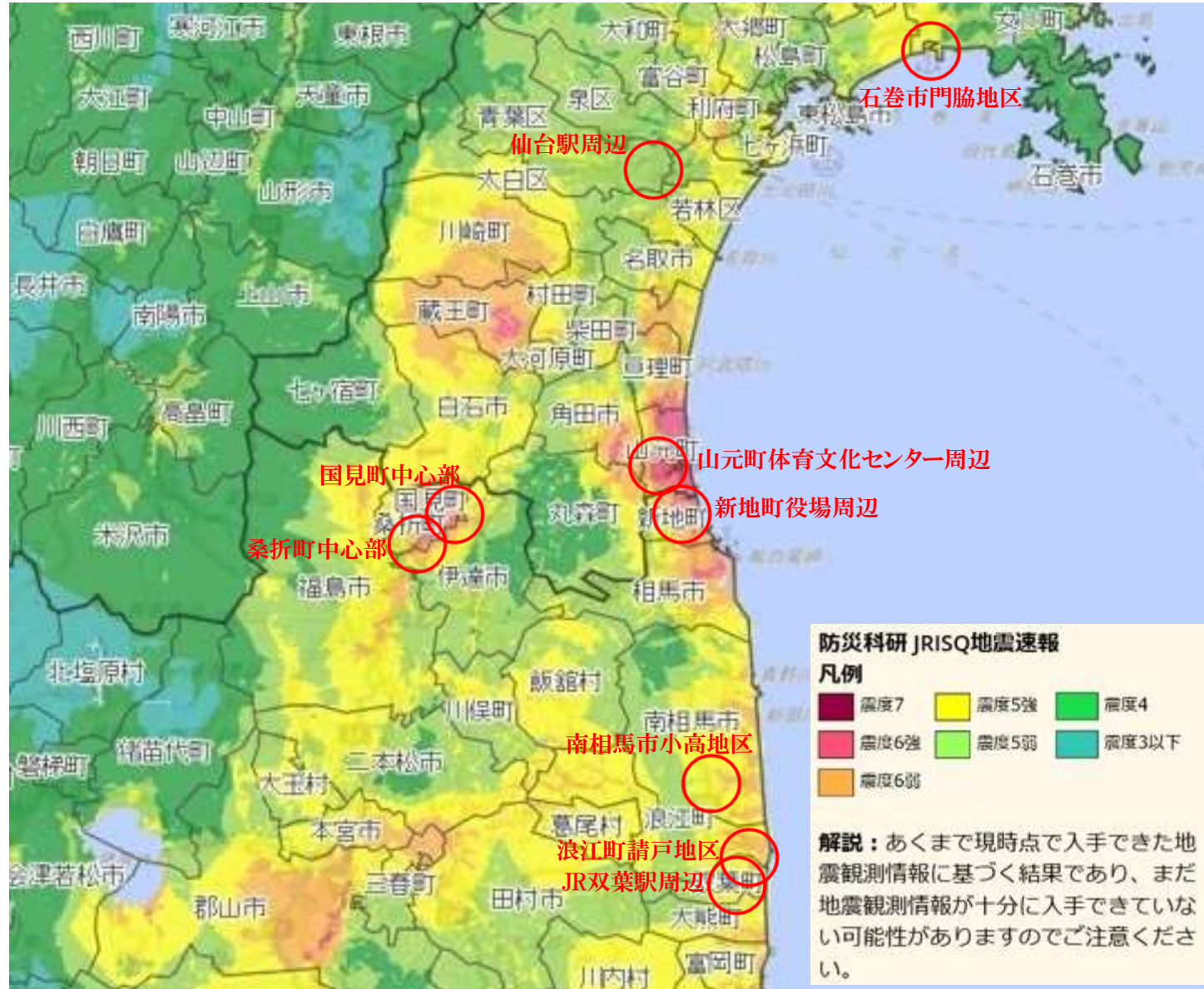


東日本大震災から10年目の宮城・福島の復興状況 -2月13日に発生した福島県沖の地震(M7.3)の現地調査を兼ねて-



防災科研『令和3年福島県沖を震源とする地震クライシスレスポンスサイト』の震度マップより

大勢の人で賑わうJR仙台駅，その背景には？

『縮む沿岸部，ひとり勝ちの仙台圏 浮かぶ被災地の不均衡』

死者・行方不明者，関連死を含め22,192人が犠牲になった東日本大震災から11日で10年を迎える。被災地は持続可能な地域社会をどうつくるのかという課題と向き合いつつある。津波被災地では，人口減少が「再加速」する沿岸部と，人・モノ・カネが集中し続ける仙台圏との不均衡な姿が浮かび上がる。東北は震災前から人口減少期に入っていた。震災直後，大きな被害を受けた沿岸部は急激な人口減に見舞われる。多数の犠牲者が出たことに加え，住まいや仕事を失った被災者の多くが都市部に移った。復興事業が本格化するといったん減り方は緩やかになる。公共工事が雇用を生み，再建されたまちに戻ってきた住民もいたためだ。様相が変わるのは2017，18年ごろだ。前年からの人口減少率は再び上がり始め，震災前のペースを上回る自治体が増えている。（途中略）復興特需が終わり，産業再生も不十分な沿岸部から働き手が流出していることがうかがえる。岩手県大槌町の平野公三町長は「仕事を求めて町外に出たり，避難先のまちにそのまま住んだりする人が多い」と嘆く。震災前は16,000人余りがいたが，現在は12,000人を切るまで縮んだ。この間，膨張を続けたのが仙台市だった。東北唯一の政令指定市・百万都市で，震災前も人口は伸びていたが，この10年で3.9%，40,000人近く増やした。このうち31,800人が転入超過による社会増だ。仙台を除く26自治体の10年間の転出超過合計は46,800人。沿岸部の流出人口のかなりの部分を吸収したとみられる。人口増に伴い経済活動も活発だ。仙台は震災被害からの復旧も早く，被災地全体の復興事業の拠点機能を果たした。また，東北太平洋岸を結ぶ高速道路網が復興財源で一気に拡充され，仙台圏には物流系の企業も集中している。（署名記事）

[3/11付け朝日新聞より]



仙台市のタワーマンション群=2021年2月1日，朝日新聞社機から



新幹線改札フロアから見た仙台駅の賑わい



仙台駅在来線の中央改札口周辺の賑わい

JR石巻駅とその周辺の市街地の現状



JR石巻駅の駅舎



石巻市営中央第一復興住宅



鳥のフンで溢れる市中のメインストリート

訪問したのが偶々早朝だったこともあるが、市中は閑散として、復興に燃えていた一時の活気は残念ながら感じられなかった。ハトやカラスの糞害が至るところで目についた。



街の至る所に見られる石ノ森章太郎のキャラクター人形

復興が進む石巻門脇・南浜地区



日和山から見た旧北上川沿いの石巻市街



日和山から見た旧北上川河口付近と建設中の津波復興祈念公園



石巻市立門脇小学校 平成23年3月11日
津波災害直後の門脇小学校



震災遺構が決定し改修工事に入る前の旧門脇小学校(2019年11月)



震災遺構のため縮小された現在の旧門脇小学校



日和山の震災記念碑



門脇小学校西隣の日和山への避難路



津波に耐え震災遺構となった土蔵
津波到達点



復興祈念公園の植林地帯と背後は災害からいち早く復興した日本製紙



東日本大震災10年 報道写真集『復興の歩み 宮城・岩手・福島』が河北新報社から刊行されていた。今回の訪問と関連する石巻門脇・南浜地区と亘理郡山元町の旧中浜小学校周辺地域の東日本大震災直後と最近の比較写真をここに転載させていただくこととした。



亘理郡山元町

震災遺構となった旧山元町立中浜小学校

関連の調査報告が本サイト“東日本大震災関連のトピックス”中の『亘理郡山元町坂元地区を歩いてきました(2013.9.28.)』にありますのでご参照ください。

